

## 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けて

2016 年 10 月 17 日  
公益社団法人 日本ボート協会  
アスリート委員会

平素は日本代表選手の活動にご理解・ご支援いただきありがとうございます。また、本年 8 月のリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックでのたくさんのご声援は遠いブラジルの地で戦う選手にとって非常に心強いものでした。現在、ボート競技に競技そのもの以外の所で注目が集まり、改めて競技環境に関して、「レガシー」の大切さ、「スポーツの力」そして「アスリート・ファースト」とは何かを問われていると感じております。そこで、トップ・アスリート、オリンピックとしての経験より、我々の活動を支えてくださる皆さまへこの場を借りてお伝えさせていただきます。

ボート競技は自然の中で行われ、また自然と共生するスポーツです。自然は我々にやさしい時もありますが、時に厳しい時もあります。リオ五輪においても、連日強い波風に選手は悩まされました。しかし、それは特定の国やクルー、選手に向けられたものではなく、すべての選手に向けられ、公平に受け入れるものであり、それで順位の変動があったとは選手一同考えておりません。いかなる状況でもベストを出す、その準備をしておくことが、トップ・アスリートの務めであると考えております。

またボート競技会場に関して、80年近く前に作られ、1964東京五輪の会場となった戸田オリンピックボートコースが、今現在も立派な「レガシー」として最も多くの競技者が利用する施設として、その地域におけるコミュニティ活性化の一端を担っております。しかしながら、現在の国際大会を開催する基準を満たすことができなくなっていることも事実です。常設として設置された2020東京大会の会場が今後50年、100年後の「新たなレガシー」となるような競技環境が作られることを切に願っております。会場、その競技を中心として地域に住む子どもたち、多くの人たちを世代を超えてつなぎ、コミュニティを活性化させ、未来を元気につなげていくことが「スポーツの力」であり、それを体現することがその競技に携わる我々アスリートの役割でもあると感じております。そのためにはもちろん、何よりも2020年、新しい五輪会場において、新たなヒーロー、ヒロインがボート競技から現れなければなりません。

また滞在場所に関して、オリンピックにおいて選手村は、たくさんの国々、ボート以外の競技の皆さまと交流し、トップ・アスリートとしてどうあるべきか、国の代表としてどうあるべきかなど様々なことを学ぶことができる機会となります。このたびのリオデジャネイロ大会においては、本村に入村することができました。欧米の国々が主となるボート競技において、世界選手権では交流することが難しい多くのアジア諸国や南米、アフリカの国々の方と、他競技ではありながらも選手村において交流することができました。国・地域を超え、競技様々の皆さまと交流し、オリンピックでしかできない他競技のトップ・アスリートとの直接交流は、我々選手自身、アスリートとしての視野を大きく広げられ、多くを学ぶことができる素晴らしい経験となったと同時に、オリンピックの本質である「国際平和」や「国際交流」の一つを担うことができたのではないかと思います。この選手村での貴重な経験は、様々な競技のアスリートだけでなく、未来を担うすべての子どもたちへ、オリンピックムーブメントを今後も伝えていく上で、大変重要なものだと思っております。

いずれも簡単なことではありません。だからこそ、日々、限界に挑戦し続けるアスリートとして、「スポーツの力」を伝えられないか、またアスリート自らがスポーツを通じて環境（自然）、地域と共生できる、あるべき未来づくりに積極的に関わっていけないか、課題に対し一つ一つ乗り越えていくことを多くの関係者の皆さまとともに目指していきたいと考えております。

以上

(補足)

アスリート委員会とは、アスリートの声を汲み上げ、組織の意思決定に反映できる仕組みの構築とアスリートとの対話による意思疎通が行われる環境を整えることをめざす目的に本年 4 月に公益社団法人日本ボート協会 強化本部のもと設置された委員会です。